

4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1)かんきつ類の優良系統・品種への更新</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○かんきつ類の優良系統・品種への更新 ○落葉果樹の凍霜害対策 ○病虫害防除 <p>1 か月予報では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べ晴れの日が多い見込みである（3月20日高松地方气象台発表）。しかし、この時期は予期せぬ突風や低温に見舞われることもあるため、気象情報には十分注意する。</p> <p>老木や経済性の悪い園地等では、新品種や優良系統へ更新する。適地適作を重視し、冬季に積雪や低温による被害の発生が懸念される園地では、収穫時期の遅い中晩柑類への更新は控え、品種特性が十分発揮できるよう心がける。</p> <p>更新の方法には改植と高接ぎがあるが、苗木による改植は3月中～下旬、高接ぎは4月が適期である。穂木、苗木は種苗法に則して流通されたものであるかどうかを十分確認する。</p> <p>ア 改植</p> <p>改植は発芽前に行い、列植えにするなど、マルチ栽培や作業性を考慮した植栽とする。粗雑な植付けは後の生育が悪くなるため丁寧に行う。特に根の乾燥は活着が悪くなるため注意する。1年生苗木の場合、主幹の長さを約40cmに切り、もし傷んだ根があれば切除する。また、接ぎ木部分が土に埋もれると、自根の発生や生育不良の原因となるため、深植えにならないようにする。</p> <div data-bbox="965 1167 1382 1621" data-label="Image"> </div> <p>写真1 苗木の植え付け</p> <p>定植後は支柱を立て固定することで、風による倒伏を防止する。また、土壌を乾燥させないように定期的にかん水を行う。生育期間を通じて十分かん水することが樹体生育促進のための重要なポイントであり、敷きわらや抑草シート等により土壌乾燥防止に努める（写真1）。なお、生育促進のため、発芽後には窒素主体の液肥を葉面散布する。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 落葉果樹の晩霜害対策</p>	<p>イ 高接更新</p> <p>高接ぎは台木が発芽した頃に行うと活着率が優れるが、接木後に降雨が多かったり、低温にあったりすると活着率が低くなり、接木後の初期生育も劣る傾向にある。</p> <p>穂木は、品種・系統が確実で、ウイルス等に侵されていない樹から採取したものを使い、なかでも充実した春枝や夏枝を利用する。また、中間台木がウイルスを保毒している、罹病性品種では激しい症状を呈することがあるので十分注意する。</p> <p>ウ 接木の方法</p> <p>よく研いだ接木ナイフを用い、台木、穂木の切り口を平らでまっすぐに、形成層がきれいにできるように切り込む。台木と穂木の形成層が密着するように合わせ、穂木が動かないよう接木テープでしっかりと固定する。穂木部は乾燥防止と雨水の侵入がないようにパラフィンテープを丁寧に被覆する。</p> <p>写真2 切り接ぎによる更新</p> <p>中間台の樹勢低下を避けるため、すそ枝を力枝として残す。切り口の枯れ込みを防ぐため、アルミホイルで覆い癒合を促進させる(写真2)。台木および中間台木部は、直射日光により日焼けが発生し樹勢低下を招くことがないよう、日焼け防止剤等を塗布する。</p> <p>発芽後は、窒素主体の液肥の散布と病虫害防除を徹底し、新梢の生育促進を図る。また、台風などによる枝折れを防ぐため、支柱の設置や誘引をしておく。</p>
	<p>落葉果樹では、温暖化によって発芽期が早まる傾向がみられるため、発芽から開花期・幼果期にかけての晩霜害には注意が必要である。</p> <p>晩霜害は、移動性高気圧に覆われ放射冷却の起こる無風の夜間から早朝にかけて発生しやすいため、週間天気予報や霜注意報に留意する。被害は、樹種や生育ステージにより異なり、生育が始まるとともに耐寒性は急激に低下する。一般的には開花から幼果期にかけて-2℃に30分以上遭遇すると、新生器官に障害が発生する危険性が高くなる。</p>



写真2 切り接ぎによる更新

項 目	作 業 内 容
<p>(3) 病虫害防除</p>	<p>晩霜害の対策については、先月の天候と農作業を参考に実施する。防風林を配置している園地では、園地内の風通しを良くして、冷気が留まらないように、防風林の手入れを行う。</p> <p>ア かんきつ類</p> <p>そうか病 本病は、近年県内での発生が増加傾向にあり、うんしゅうみかんでなく、「愛媛果試第 28 号」（紅まどんな）も注意が必要である。旧葉にある越冬病斑が伝染源となり、雨滴を介して新梢・春葉へ感染する。防除は、新梢が 1 cm 程度となる時期が最も有効であり、適期を逃さないよう注意する。</p> <p>かいよう病 本病に弱い品種では、越冬病斑の除去や銅剤の散布により、新梢や新葉への感染防止に努める。防除は、「開花前」と「落弁期」に実施する。</p> <p>イ 落葉果樹</p> <p>キウイフルーツかいよう病 本病は、発芽期から新梢伸長期にかけての感染リスクが高いため、薬剤防除の徹底に加え、定期的に園地を巡回し早期発見に努める。葉の褐色斑点、赤褐色あるいは白濁した樹液の漏出、花蕾や新梢の枯死といった症状が確認された場合には、発病部位を切除し、園外で適切に処分する。なお、凍害によっても樹液が流出することがあるので、本病との判断が難しい場合は指導機関に相談する。</p> <p>ウ 共通</p> <p>アブラムシ類 かんきつ類では、アブラムシが多く寄生すると新梢や新葉が奇形となって生育が阻害され、葉や果実が黒くなるすす病の原因にもなる。また、落葉果樹では、もも、うめなどで葉が巻き込む被害が発生するので、被害の拡大や増殖を避けるため、発生が見られたら早めの防除を徹底する。</p>

(作成 果樹研究センター)